熊大教育実践研究　第31号，171－176，2014

人間行動における差別といじめ

吉　田　道　雄[*1]

A Study of Discrimination and Bullying

Yoshida, Michio

(Received October 25, 2013)

いじめの実態調査

文部科学省は学校におけるいじめの調査を継続してきた．その際，かつて，いじめは“①自分より弱い者に対して一方的に，②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え，③相手が深刻な苦痛を感じているもの．なお，起こった場所は学校の内外を問わない”と定義されていた．これに“なお，個々の行為がいじめに当たるか否かの判断を表面的・形式的に行うことなく，いじめられた児童生徒の立場に立って行うこと”という条件が付けられていた．しかし，その後も深刻ないじめが問題化したことから定義の見直しが行われた．

新しい定義では，まず“個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は，表面的・形式的に行うことなく，いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとする”ことが冒頭に掲げられた．その上で，“「いじめ」とは，「当該児童生徒が，一定の人間関係のある者から，心理的，物理的な攻撃を受けたことにより，精神的な苦痛を感じているもの．」”になった．“なお，起こった場所は学校の内外を問わない”という条件はそのまま付けられている．この新しい定義を基にした調査が2006年度から実施されている．その結果，熊本県は全国で最多の件数が報告され続けてきた．ただし，2012年度の速報値（文部科学省2012）では鹿児島の件数が際立って増えている．この数値が連続して高かったといって，熊本県において全国で最も多くのいじめが発生していることを示しているわけではない．あくまで数値的に“いじめ”が最も多く“認知”されたということだ．

もちろん，いじめは“ない”ことが理想である．だから，その認知件数が全国最多である事実を“多くのいじめが発見できたのだから，それはそれでよし”と単純に評価するわけにはいかない．

しかし，すべては事実を発見することからはじまる．問題を見つけることができなければ対応のしようがない．それぞれの学校で個々のケースを分析し，適切な対応法や解決策を探っていくことこそが求められているのである．また，それらを共有化することも期待される．学校に限らず組織で起きた問題は内部で処理して，できるだけ外には出さないでおこうという気持ちが支配的になる．しかし，現実には原因や経過が類似したケース，また解決策が共有化できる事例が多いのである．もちろん，プライバシーを十二分に配慮しながら学校や関係機関と情報交換する．それが問題の解決や再発防止のために強力な力になるはずである．

人間集団における差別やいじめの必然性

そもそも人間が集団をつくって生きている限り，差別やいじめは必ず起きる．あるいは，すべての人間が差別といじめをする潜在可能性を背負っている．人は顔かたち，背丈や体重など外面的な違いがある．これらははっきりと目に見える．また，性格や能力といった内面的な特性についてもそれぞれ固有のものをもっている．こうした“違い”は人類の存続にとって欠くことができない．それによって，人類は厳しい環境の中で生き続けてきたし，これからも存続していける可能性があるのだ．

地球上に“寒さ”に強い者だけしかいなければ，このところ亜熱帯化したかと思われるわが国のような暑さが襲ってくれば絶滅してしまう．逆もまた真なりである．また，病原菌やウィルスたちも生き残りをかけて進化し続ける．ワクチンなどのいわば飛び道具も一時的な効果はあるが，やがてそれを克服した新種が登場する．

ヒトに限らず地球上のすべての生き物は，存続の可能性を高めるために“ありとあらゆる環境条件”に耐えられる力を必要としている．これは生物にも当てはまる．とにかく生き続けていかなければなら

＊1　熊本大学教育学部附属教育実践総合センター：
〒860-0081　熊本市中央区京町本丁5番12号

ないのである．ここには“何のために”といった疑問が浮かぶ余地すらないように思える．とにかく“与えられた命を維持し，存続していかなければならない”．すべての生き物が，そうした強迫的な観念をもっているのではないか．

しかしながら人間にしても，一人ひとりは一組の遺伝子しかもつことができない．そこで，お互いに違った特性の遺伝子をもち合っていて，いざというときには誰かが生き残る戦略を取ることにする．そうすれば，個体は命を失っても，人類全体としては存続してくことができる．だから，“違う”ということは，人類全体が加入している“存続保険”なのである．ところが，この“違う”ことが，そのまま“差別やいじめ”の原因になる．それは，とにかく“違う”からである．

鉄でできたものはできあがったときは美しくても，空気に触れるうちに“必ず”錆びる．そこで鉄橋はペイントを塗って錆を防ぐ．しかし，その塗料も時間とともに剥げてくる．そこでその前にペイントを塗り直す．ところが現実は厳しい．それほど気をつけていても，鉄自身が内部から劣化していく．こうした過程は鉄に限らず，地球上のすべてのものに起きる変化である．

差別やいじめも，人類が地球上に生きている限り根絶することは不可能である．われわれは改めて“自分を知る”ことの重要性を押さえておく必要がある．差別やいじめについても，その潜在可能性をすべての人間が背負っていることを認めることからはじまる．それを人間の“特性”と考えるか，あるいは“弱点”と言うのかは問題ではない．とにかく，その現実を真摯に認めて，いつも自己点検を続けていくことである．少しでも気を緩めると悪魔はいつでも耳元でささやいてくる．世の中で起きる事故やトラブルと同じように．

いじめの認知件数

文部科学省が“いじめの定義”を変えてから，熊本県が“いじめの認知件数”でトップを続けてきたことはすでに述べたとおりである．ところが2012年11月に発表された前年度におけるデータではその様相が大きく変わった．自治体によって人口が違うから，その比較は“児童生徒1000人あたりの認知件数”で見ることになるが，2011年度は熊本県がトップで32.9件だった．これに続くのは18.3件の大分で，３位は12.2件の岐阜，さらに11.4が千葉で，愛知が10.0だった．これがトップ５だが，これ以下は10.0を切っていたのである．また，1.0以下が，0.8の福島，0.9が和歌山，宮崎，そして最少は0.6の佐賀だった．

それが2012年度に発表された前年度の調査ではどうなったか．鹿児島県が群を抜いて159.5件という３桁の数値になったのである．前の年が2.0だったことを考えるとほぼ80倍である．この数値を見れば誰もが“これまでよく調べていなかったのではないか”と思うに違いない．鹿児島に続くのが奈良県の43.0件だが，これも前年の数値は1.8に過ぎないから24倍も増えたことになる．第３位の宮城県は前年度の6.7件が37.6で5.6倍の増加である．さらに京都府の場合は1.6が19倍の31.0になった．いずれにしても“伸びが大きすぎる”というのが正直な印象である．

なお，京都府のあとにも山梨県25.5，千葉県24.2と20件以上が続いている．また，トップを走ってきた熊本県は17.8で７位と前年に比べて半数近く減少した．

さらにこの調査では，認知件数のうち“問題が解消している件数”も挙げられている．それによると，鹿児島県では86.8％が“解決済み”とされている．つまりは“件数は多かったがほとんどは問題がなくなった”と読める．その具体的な内容についてはわからないが，これをどう解釈していいのか．この数値を見ると，47都道府県のうち“80％”以上が24都道府県，“70％台”が15で39都道府県に達している．最も低いのは岐阜県の56.7％である．

こうした数値を見ると，都道府県同士の比較はまったく無意味なことがわかる．前回の全国平均値にしても5.0に対して，新しいデータは10.4と倍増している．これほど大きな変動が１年間で起きるはずがない．“去年までのデータは何だったのか”と言いたくなる．この数値を“事実”として認定するのは不可能だと断定されても反論できないに違いない．

データの違和感

われわれは確たる根拠を示さずに推測することを避けなければならない．そんなことをすれば“恣意的だ”“邪推だ”と批判される．しかし，それを覚悟してでも直感的に“違和感”を覚える数値がある．たとえば，東京都の1000人あたりのいじめ認知件数だが，前年は4.0だった．これが2012年度は6.8になっている．大阪府の場合は，同じ時期に2.4が3.5件になった．したがって，わが国を代表する二つの大きな都府で数値は確かに増えた．しかしその実数は東京都で8,313件であり，これは熊本県の3,649件と比較して2.27倍である．人口では東京都が2013年

１月の推計で13,222,760人，一方の熊本県は2012年度のデータだが1,807,201人だった．人口の比率で7.3倍になる東京におけるいじめの認知件数が熊本県の2.27倍なのである．この数値を見て“どこかおかしい”と言えば，“根拠のない邪推をするな”と批判されるだろうか．多くの人々がその数値に疑問をもつのは当然ではないか．大阪府についても同様である．前年度の2.4が3.5に増えたとはいえ，その件数は3,327である．これは熊本県の3,649件よりも絶対数そのものが少ないのである．ここでも“そんなことはあり得ない”と判断すれば，やはり“邪推だ”と言われてしまうのだろうか．

これ以上，個別に数値を挙げて比較する必要はないだろう．ここではっきりしているのは，①“いじめの実態”は報告された件数だけからはつかめない，②自治体間の比較はまったく意味がない，③全国の子どもたちの間にいじめがある，さらに推測になるが，④調査ではカウントされないいじめが存在しているに違いないことだ．しかも，この数値が急激に減少するとは考えにくい．それは学校だけで解決できる問題ではないからだ．社会全体にストレスが充満し，大人の社会で毎日のように殺人事件が起きている．そんな時代である．

大人社会のいじめ

交通システムを中心に移動手段は止めどなく発達している．また情報手段の革新も際限がない．ストーカーに狙われると，どこまで逃げても追いつかれてしまう．それが悲惨な殺人事件にまで繋ることすらある．また自死者が15年ぶりに３万人を切ったことがニュースになる時代である．

わが国における凶悪犯罪の件数そのものは減少している．犯罪が増えたように感じるのは，マスコミをはじめ人々が騒ぎすぎるからである．そんな“専門家”の意見もある．しかし，“だから現状でいいんだ”と放置するわけにはいかない．いずれにしても，“いじめ”は，こうした環境のもとで起きているのである．

教師自身がいじめに加わったという信じられない事例もあるが，基本的には教師たちだけで問題を解決することはできない．学校だけでなく社会全体が発想の転換をする必要がある．教育における問題のすべてが，学校という大人がつくった社会で起きているのである．

そもそも，いじめそのものが学校における特殊な現象ではない．大人の世界で問題になるセクシャルハラスメントやパワーハラスメントなどは，まさにいじめそのものである．古くは赤穂浪士の物語にしても，今風に言えば了見の狭い管理職によるきわめてレベルの低いいじめに端を発しているのである．それに，これまた古典的な表現の“お局様”にしても，その元凶は古参の女性である．職場の先輩として若い人たちを育てるのではなく，いじめる快感を楽しむ．それによって自分の欲求不満を解消するわけだ．自分よりも弱い者を困らせて喜ぶ．こんな人に限って力の強い者には弱いのである．何とも寂しい話である．

ところで，大人の世界においてもいじめが幼稚化している．ある大手化粧品会社の支店で起きたトラブルに対して裁判所から賠償命令が出た．誰もが訴訟内容を見れば驚くに違いない．会社の研修会で，ある月の販売目標に達しなかった女性に対してコスプレを強要したというのである．裁判所に訴えた女性以外にも３人の被害者がいたようだが，コスチュームが入った箱を選んで，それを長時間にわたって着用させたという．コスチュームは，たとえばウサギ耳のカチューシャなどだった．しかも，翌々月の研修会でそのときの写真をスライドで上映したのである．これが大人のすることなのである．ともあれ女性は会社と当時の上司を相手取って訴訟を起こしたわけだ．これに対して裁判所は計22万円の損害賠償の支払いを会社と上司に命じた．

今日においても，“大手化粧品会社”にこうしたレベルの低い管理者がいるのである．判決は“任意であっても拒否するのは非常に困難だった．正当な職務行為とはいえず，心理的負担を過度に負わせた”と指摘している．

この文面から察すると，上司側は“任意”だったことを強調したようだ．“任意性”などを問題にする以前に，仕事の目標達成とコスチュームには何の関係もない．これを本気で“職務行為”と思っていたと言うのだろうか．しかも，その写真を２か月後の研修の場で映し出したというから，人間としての品性すら疑われる．これは単なる“いじめ”に他ならない．人を辱めることでしか喜べないとしたら，何とも哀れなメンタリティの持ち主ではないか．この上司は自力でストレスをマネジメントできなかったのだろうか．化粧で見栄えだけよくしても，心の中が磨かれていなければ，人間としては最低である．化粧品は内面を隠すうわべだけのものなのだろうか．

体内に存在するいじめの心性

これまでも，いじめが原因だと思われる子どもの自死が起きると一斉に焦点が当てられ，しばらくの

間は議論が沸騰する．しかし，それも時間の経過とともに“沈静化”して，また次の“悲劇”が起きるまで待っているかのような状況が続く．これは人間の悲しき特性なのだろうか．地球に人間が存在する限り，人々の心の中から差別やいじめの動因を完全に消し去ることはできない．そう考えている筆者は，学校から依頼されて児童生徒たちに話をするときも，そのことを強調している．

インフルエンザに罹らないために，日ごろから手洗いやうがいをしっかりする．不幸にしてウィルスにやられたときでも，それが重症化しないように予防接種をしておく．ともかく意識した予防のための活動が必要なのである．差別やいじめも同じことである．それを引き起こすウィルスはいつでもどこでも存在している．いや，インフルエンザウィルスのように，それがいつもは体外にいると考えること自身がすでに間違っている．

ここで頭に浮かぶのがヘルペスである．ヘルペスは一度感染してしまうと，菌が体の中に入って一生付き合わないといけなくなる．いつもは神経細胞の中に潜んでいるため，いわゆる免疫力が働かないという．完治できないのである．そして，免疫力が低下したときに再発することになる．仕事に疲れたりストレスが溜まったりすると，細胞の中にいるヘルペスが活動しはじめるのである．唇の周りに水疱ができる口唇ヘルペスはよく知られている．このヘルペスは感染力が強いという．たとえとしては行き過ぎだと思うが，“差別やいじめ”は何とヘルペスに似ていることか．それが他人に“感染する”ことまで含めてきわめて類似しているではないか．

“ヘルペス”と“いじめ”には明確な違いがある．ヘルペスの場合，地球上の“すべて”の人間に宿っているわけではない．これに対して，“いじめ”の動因は，“あらゆる人間”の体内に潜んでいると主張したい．しかし，この点を除けば“ヘルペス”は“いじめ”と同じ動きをする．何らかの理由で体内に入ったヘルペス菌は，いつもはひっそりと身を隠している．したがって宿主もその存在に気づかない．ところが，ストレスが高まったり体力が弱ったりすると，それが活性化するのである．今日ではヘルペスの増殖を抑える薬が販売されている．唇の周りにヘルペスの気配が見えたら，すぐに薬で対応すると軽くて収まる．それを放っておくと他人にもわかるほど悪化する．このように，病気はもちろん人間関係や心の問題も小さいうちに対応することが求められる．風邪を引かないように日ごろから気をつけるのと同じ感覚で，差別やいじめについても気を配り続けるしかないのである．

学校における差別・いじめと養護教諭の役割

学校における差別やいじめの問題では養護教諭の果たす役割が大きい．養護教諭は基本的には保健室にいて，児童や生徒たちの心身の健康を図る教師である．戦後から高度成長期のいわゆる団塊世代が子どものころの保健室と言えば，腹痛のときや怪我をした際に行くところだった．そうしたこともあって，当時は養護教諭を“赤チン先生”と呼んだりしていた．それは決して侮辱的な表現ではなく，子ども心としては親しみを感じていたのである．しかし，時代とともに養護教諭の役割は大きく変わっていく．子どもたちの“こころ”の健康が揺らぎはじめたからである．

いわゆる不登校とは違って，学校には出かけるが教室まで行けずに保健室で多くの時間を過ごす子どもたちがいる．これを保健室登校と呼んでいるが，そこで対応するのが養護教諭である．教室に行けない理由は様々で，その中にはいじめが原因の子どもたちもいる．こうした問題を抱えた児童生徒について，養護教諭は多くの情報を得ることになる．担任の教師に言えないこともあれば，ときには体罰を受けた情報が含まれたりもする．また保護者との葛藤といった，きわめてプライベートな問題を語る子どもたちもいる．

こうした状況を踏まえれば，児童生徒の健全な発達を図るためには，養護教諭がもっている情報を学校全体で共有化することが欠かせないのである．もちろん，個人情報なども含めて，その管理を厳密に行うことは基本的常識である．ともあれ，学校のすべての教員が養護教諭の役割を尊重し，その情報と意見や判断を活かすことが求められるのである．さらに強調するならば，子どもたちの心身の健康については，養護教諭が学校の中でリーダーシップが取れるような環境づくりが必要なのだ．

ところで，熊本大学の教育学部には養護教員養成課程がある．ここでは文字通り養護教諭を養成する．これは国立大学法人の４年生課程としては九州で唯一のものである．さらに熊本大学には養護教諭特別別科と呼ばれる課程もある．これは１年課程だが，３年間の看護学校等を卒業した学生が，さらに養護教諭の教員免許を取るために設けられたものである．こうしたことから，卒業生たちは看護師免許等に加えて養護教員としての免許を取得することになる．この別科もやはり九州では唯一で，全国でも北海道教育大学や山形大学，新潟大学，金沢大学，岡山大学など数カ所しかない．

筆者は長年にわたって養護教育課程で授業をして

きた．大学院ができてからはその担当もするようになった．さらに特別別科でも13年にわたって授業をしていた．そうしたことから，現在でも現職の養護教諭と話をしたり，情報交換をする機会が多い．そうしたときに，養護教諭が置かれている状況や立場などに関する情報も得ることができる．

そんな中で明らかになるのは，校長をトップにして，教員たちと養護教諭との関係ができていることの重要性である．それは，養護教諭の情報に，あるいは単純に“声”といってもいいが，それに耳を傾けるかどうかの問題である．別の言い方をすれば，養護教諭の専門性を評価し，そのリーダーシップを認めることでもある．

筆者がこれまで養護教諭から聞いた話の中で最悪のケースは次のようなものだ．子どもが保健室にやってきて教室で困っていることを話した．そのときの内容はおそらく“いじめ”に関するものだったと言う．そこで養護教諭はすぐにその話を担任の教師に伝えたわけだ．ところが，それを聞いたとたんに返ってきたセリフは信じがたいものであった．“○○は何であんたに言うのかい．そんならあんたが担任すればいい…”．そのとき養護教諭は開いた口がふさがらなかったという．とても現職教師の発言だとは誰もが信じないだろう．それは“担任の先生の虫の居所が悪かったからに違いない”などと苦笑いしてすむ話ではない．もちろん当事者でない者には，その原因を確定することはできない．しかし，こうした発言をする教師が，少なくとも１人は現実にいたのである．あるいは養護教諭との関係もよくなかったのかもしれない．

その一方で，養護教諭が評価する教師の実例もある．たとえば保健室にやってきて，“○○は自分の話は聞かないので先生から言ってほしいのだけれど”と依頼する担任教師もいる．これは教師にとって勇気のいることである．“自分がリーダーシップを発揮できないことを認めているように思われるかもしれない…”．そんな気持ちが行動を抑制する．しかし，１人の教師がすべての子どもたちに言うことを聞かせると考える方が無理な話なのである．いわば相性といったものもある．“いま，この子どもにとって効果的な働きかけは何か”．そのことを真摯に考えれば，“人に依頼する勇気”をもつこともまた教師に求められているのである．

また“今日は学校に保護者が来るのだけれど，一緒に話を聞いてほしい”と依頼された経験もあるらしい．さらに，“保健室を不在にはできないので，○○先生に頼むから，家庭訪問には一緒に行ってほしい”と言われたケースもあったという．

いずれも子どもたちのことを真剣に考えている教師たちなのである．これらは，担任自身の姿勢によるものだが，そうした態度や行動が“当然だ”という職場の雰囲気が大きな影響をおよぼすのだ．

まとめに代えて：
差別，いじめの必然性とその克服

すでに述べたように，“鉄は必ず錆びる”．これは，一般人にとっては揺るぎない事実だろう．そもそも錆は“金属の表面の不安定な金属原子が環境中の酸素や水分などと酸化還元反応（腐食）をおこし生成される腐食物（酸化物や水酸化物や炭酸，塩）(Wikipedia)”なのである．もともと自然界にある鉄は“酸化された状態”で安定している．それを人間が“力ずく”で成分の鉄だけを引きはがすのが“精錬”なのだ．そこで，鉄の状態で放置しておけば，元の自然な姿に戻ろうとするのである．これを文字通り“還元反応”と呼んでいる．しかし，人間にとって鉄は欠かせない．したがって，“鉄が錆びるのは自然だから仕方がない”とあきらめることはできない．そこで“防錆”のための様々な工夫が行われてきた．鉄の表面にカバーを被せるメッキもその一つである．また，塗料を使うのも日常的な防錆手段である．そして注意深くメンテナンスをしておかないと，塗料は剥げるし，鉄そのものも腐食する．

われわれは“錆びること”を“腐食する”とか“腐る”などと言う．ここにも人間の“自己中心的発想”が透けて見える．事実は“本来の姿”に還るだけなのである．自分たちに都合の悪いことだから“腐った”などと忌み嫌うような言い方をするのだ．

それはともあれ，生まれたばかりの赤ん坊のときは彼等が“いじめ”や“差別”をする心配などしなくていい．しかし，その成長に伴って，地球上で生きているものが潜在的に背負ってきた意識が蘇ってくる．それは，われわれに備わっている“差別”や“いじめ”の意識である．これこそが，生物としての人間が背負っている厳しい現実なのである．

BBC製作の“LIFE―いのちを繋ぐ物語―”という映画がある．地球上の生き物を世界規模でフォローしたドキュメンタリーである．この映画は北極海のアザラシの親子からはじまる．スクリーンには，母親が海の中で赤ん坊を育てている様子が映し出される．それからカメラは一気にズームアウトする．親子がいた氷の穴が点になるほどの空撮になるのである．そこに真っ白な氷の平原が広がり，アザラシの親子以外の生き物はまったくいないかのように見える．そのとき，“これこそが外敵から子どもを守

る唯一の方法なのだ…”というナレーションが流れる．母親は命を繋ぐために自分の命すら顧みない究極の犠牲を払うことがわかるのである．それに引き替え人間の方は一体どうなっているのか．近年の育児放棄や児童虐待のニュースに触れるたびに背筋が寒くなってくる．問題は子育てだけに限らない．いわゆるDV（Domestic Violence）ということばがあたかも日常語と化した感がある．

さて，“LIFE”でアザラシに続いて登場するのは猿である．画面が変わった瞬間に，馴染みのある風景が目に飛び込んでくる．そこに映っているのは，長野県にある地獄谷野猿公苑の“世界で唯一，温泉に入る猿”である．まさに猿たちが“悦楽の顔”をしながら温泉を楽しんでいる．そんなほほえましい映像に，厳しいナレーションが挿入される．じつは地獄谷に住んでいるすべての猿が温泉の恵みを享受していないことが明らかにされるのである．何ともショッキングな情報である．つまりは“いいところ”に生まれたら，赤ん坊のころから“いい湯だな”とばかり温泉を楽しむことができる．しかし，そうでなければ高齢になっても，温泉を目の前にして震えて過ごさなければならないのである．

地獄谷の猿たちは，“ほほえましさ”とはかけ離れた“差別主義者”たちだ．映画“LIFE”のナレーションだけを聞くとそう言いたくもなる．まさに猿の残酷な一面を見せつけられたと思ってしまう．しかし，それは自然界の摂理に対する誤解だと猿たちは反論するに違いない．これこそが，営々と築かれてきた生き残りのための最良の方策なのである．時々刻々と変化していく環境の中では，少しでも強い者が生き残っていく．そして，その望ましい体質を継いでいくために，強い者はさらに強くなろうとするのである．それは，一方で弱い者はますます生きる力を失っていくことも意味している．ダーウィンの“自然淘汰”“適者生存”は，そうした事実を主張しているのである．つまりは，地獄谷の猿たちの，いわば差別的と見える行動は進化論的に当然のものなのだ．じつに厳しい話ではあるが，われわれはこうした事実を受けとることから，改めて人間としての生き方を探求していかなければならない．

ところで，大脳には旧皮質と新皮質がある．動物である猿たちは旧皮質の部分が圧倒的に大きく，それに支配された行動を取るのである．これに対して人間では新皮質が発達している．その厚さはわずか２㎜ほどだと言うが，ここで合理的な判断や言語を理解するのである．いわゆる“理性”を司る役割を担っているわけだ．猿たちの場合は，生きるために“差別的”な行動を取ることが必要であるに違いない．一方，人間は大脳新皮質でそれをコントロールすることができるのである．ただし，われわれの大脳から旧来の皮質が消えてなくなったわけではない．したがって，人間も地球上で生き残ろうとし続けてきた過去を背負って，“差別的行動”を取ろうとするエネルギーを本性的にもっているのである．そこでいつも，“本来”の状態に戻ろうとする力が働くことになる．

われわれが地球上で生きる動物の仲間であり，体全体の細胞に進化の歴史が刻まれているのは確かな事実である．受精によって一つの細胞が生まれ，それが分裂を繰り返しながら人になっていく．その過程を描いた図を見ると，分裂がスタートして間もないころの姿は他の動物たちと変わらない．受精から分裂がはじまりしばらく経って胚といわれる段階に達したとき，魚も爬虫類も猿も人間もほとんど同じタツノオトシゴのような形をしている．また，人間とチンパンジーのDNAは98％あるいは99％が一致するとも言われる．つまりは“ほとんど同じ”というわけだ．こうした事実を受け止めるなら“人間は違う”などと自己満足しているわけにはいかない．自分たちを“万物の霊長”などとは思い上がりも甚だしいのである．ただし，わずか２㎜とはいえ，われわれは“理性”を司る“新皮質”をもっていることも確かな事実なのだ．したがって，いつも“先祖返り”しようとする“旧皮質”を押さえて“人間らしく”行動していくことができるのである．こうして，この世のすべての生き物が“差別的行動”を取っていたとしても，人間はそれを排除できる力をもっているのである．

引用文献

文部科学省（2012）．いじめの問題に関する児童生徒の実態把握並びに教育委員会及び学校の取組状況に係る緊急調査結果について（概要）

文部科学省(2013)．児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査．文部科学省ホームページ．